

発表2 バイリンガル児・マルチリンガル児と発達障害 松井智子先生（東京学芸大学国際教育センター）

概要

一般的な自閉スペクトラム症の典型的な特徴、そのアセスメント、併発する可能性のある発達障害や知的障害を概説し、そのうえでリミテッド状況のマルチリンガル児・バイリンガル児の問題を考察した。一般的に子どもの社会性、感情、認知、コミュニケーションの力は幼児期に家庭での言語を介して相互依存しながら発達し、2言語獲得できる状況であった場合でもそのうちの第一言語の発達が重要である。信念や思想の概念的理解（心の理論）はさまざまな社会行動を支える基礎となるもので、「目的・意図・注意の理解（9-12か月）」、「ふり遊び・欲求の理解（2歳）」等の段階を経て5歳までに獲得する。自閉症児の多くは心の理論の障害であるという仮説が提起されており、「誤信念課題」と呼ばれる課題—自己や他者の意図や思考、信念を理解できるかどうか—にパスできないことがわかっている。この「誤信念課題」は「～と言った」「～と思った」という補文構造の理解がかかわるもので、一般に5歳でパスできるようになるが、国際結婚家庭や幼児期の文化間移動により第一言語のインプットが少ない子どもは、言語力とくに補文構造の習得が遅れているため、誤信念課題にパスできない可能性がある。そのことを確認するために、17名の日本生まれの日系外国人5歳児を対象に調査を実施した。その結果、日本語語彙力は母語話者幼児に比べて低いこと、補文構造と誤信念課題の理解にも遅れがみられること、しかし非言語推理能力には遅れないことがわかった。このことから、幼児期の社会性の発達にとって第一言語の発達が重要であることが確認できた。また言語と非言語推理能力はそれぞれ独立して発達する可能性が高いため、リミテッド状況にある子どもの発達を正しく把握するには、両方の発達を見る必要があることが示唆された。

ディスカッションの内容のまとめ

言語的にも地域的にも多様な方が集まり、多様な問題が提出された。子どもの6割が外国籍の子どもという地域の場合、マルチリンガルということで日本語の支援教育を受けるルートと特別支援教育のルートがあり、特別支援教育のルートに入ると日本語支援を受けられないという制度は問題で両方をやっつけたい手立てが必要である。現在は先生方の自助努力で連携して子どもの発達が伸びたケースが報告された。連携をどうすればよいかが大変だ。その中で親の支援も必要だ。外国にルーツがある親は日本社会の中で理解されていない。特別支援級に行くように言われた場合、それがどのようなものかを十分な説明がないケースがある。スペシャルトリートメントと言われて日本語のクラスだと信じていた例がある。

マイナーな言語の場合は、大使館や留学生のネットワークを使って支援を受けられるところをさがす、通訳の方を導入するには問題もあり通訳者の質、価値観が取り込まれるなどの問題もある、乳幼児期の家庭でのかかわり。マイノリティのお母さんで日本語が拙い場合、社会的な地位が低いと思われる言語の場合、その子の社会認知言語発達に影響を及ぼしている、親がリミテッド状況の場合に、どの言語選択をしたらよいかという話題が出た。これから扱わねばならない課題が出てきた意味で有意義だった。（権藤桂子先生）

【参考文献】

・ *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders: DSM-4* American Psychiatric Association 1994

・ *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders: DSM-5* American Psychiatric Association 2003

- ・ Astington, J. W., & Pelletier, J. 2005. Theory of mind, language, and learning in the early years: Developmental origins of school readiness. In B. D. Homer & C. Tamis-Lemonda (Eds.), *The development of social cognition and communication*, 205–230. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- ・ Baron-Cohen, S., Leslie, A. M., & Frith, U. 1985. Does the autistic child have a “theory of mind”? *Cognition*, 21, 37-46.
- ・ Denham, S. A., Zahn-Waxler, C., Cummings, E. M., & Iannotti, R. J. 1991. Social-competence in young children's peer relationships: Patterns of development and change. *Child Psychiatry and Human Development*, 22, 29-43.
- ・ de Villers, J. G., & Pyers, J. E. 2002. Complements to cognition: a longitudinal study of the relationship between complex syntax and false-belief understanding. *Cognitive Development*, 17, 1037-1060
- ・ Garcia Sanchez, I.M. 2006. More than just games: Language socialization in an immigrant children’s peer group. *Texas Linguistic Forum* 49, 61-71.
- ・ Happe, F. G. E. 1995. The role of age and verbal ability in the theory of mind task performance of subjects with autism. *Child Development*, 66, 843-855.
- ・ Jenkins, J.M., & Astington, J.W. 1996. Cognitive factors and family structure associated with theory of mind development in young children. *Developmental Psychology*, 32, 70-78.
- ・ Kohnert, K., Yim, D., Nett, K., Kan, P. F., & Duran, L. 2005. Intervention with linguistically diverse preschool children: A focus on developing home language(s). *Language, Speech, and Hearing Services in Schools*, 36, 251-263.
- ・ Lalonde, C. E., & Chandler, M. J. 1995. False belief understanding goes to school: On the social-emotional consequences of coming early or late to a first theory of mind. *Cognition & Emotion*, 9, 167-185
- ・ Lee, V. E., & Burkam, D.T. 2002. *Inequality at the Starting Gate*. Washington, DC: Economic Policy Institute.
- ・ Mendez, J. L., Fantuzzo, J., & Cicchetti, D. 2002. Profiles of social competence among low-income African America preschool children. *Child Development*, 73, 1085-1100.
- ・ Moore, C., Pure, K., & Furrow, D. 1990. Children’s understanding of the modal expression of speaker certainty and uncertainty and its relation to the development of a representational theory of mind. *Child Development*, 61, 722–730.
- ・ Raver, C. C. 2002. Emotions matter: Making the case for the role of young children's emotional development for early school readiness. *Social Policy Report*, 16(3), 3-19.
- ・ 松井智子 (2013) 『子どものうそ 大人の皮肉—ことばのオモテとウラがわかるには』東京：岩波書店

以上